いただきました。その着任当初に思い出したのは、先ほどの先生の言葉でした。着任してすぐに周りから「先生、先生、」と呼ばれ、自分は先生と呼ばれるほどの人間なのかと何度も疑問を抱きました。

しかし最近思うのは、資格や立場や私自身が私を「先生」たらしめるのではなく、周りのあたたかいお育てが私を「先生」ならしめているということです。この「たらしめる」と「ならしめる」には大きな差があります。私たちが合掌し念仏申すのも自分の力でたらしめているわけではありません。阿弥陀如来のおはたらきが私を念仏申す身に仕上げならしめている。それは間違いなく阿弥陀如来からのあたたかいお育てにあずかっているということです。

寺院にいると様々なお育てに気付かせていただきます。御門徒方と話していても楽しい話しだけではなく、ときとして寂しく悲しい話しを耳にすることも度々あります。とくに親族が亡くなった場面に出会いますと、何とも言い難いさびしさがあります。そのような中で、何も言われずともその手を合わせて「南無阿弥陀仏」と念仏申す御門徒さんの姿は、阿弥陀如来の大慈悲に包まれている姿そのものです。そして、それはまさに仏様からのお育てにあずかっていた姿とも言えます。

最後になりますが、トロント仏教会に戻って来られたことを大変嬉しく思うとともに、またここで仏法伝道に尽力できることを感謝し勤めて参ります。コロナ禍で難しい状況ではありますが、また皆さまと一緒に本堂で合掌し念仏申す日が近づくことを願っております。　南無阿弥陀仏

トロント仏教会駐在僧侶　大内祐真

寺院での法要について

また開門するにあたりCOVID-19の集団感染ならびに発症は極めて危険なものであり、危機管理を皆様のご協力のもと寺院でも徹底していく次第です。それゆえ地方及びカナダ国の定めた規則と国際勧告に基づき細心の注意を徹底いたします。お寺にお越しになる際は、時間をかけて記載されているすべての注意事項と手順をご確認いただき、ご自身でも新しい規則を順守してください。

安全性に関わる重要な規定

法要参拝にあたり以下の注意事項をお読みください。

- ●本堂への収容人数は10人以下となる。
- ●法要参拝には事前予約が必要となる。
- ●各参拝者(子どもを含む)は、健康状態を確認するアンケートに毎回（各法要）答える。
- ●寺院にいる間は常に必ずマスクの着用、手の消毒、人との物理的距離を取る。
- ●寺院は必ず各法要後に人が触る箇所等の消毒・清掃を徹底します。
- ●手の届く個所に消毒液等を用意しているので各自ご利用ください。

以上の事項に従えない場合は、寺院への立ち入りをお断りさせていただくことがございます。また他の参拝者の安全性を考慮し退出をお願いすることがあります。何らかの理由で安全への規定を守ることが難しい場合は、ご自宅にてライブストリーミングで法要にご参加ください。

重要な変更事項

- ●祥月法要の詳細につきましては寺院のスケジュールとウェブサイトをご参照ください。
- ●（開教使と開教使アシスタントを除く)本堂内での読経はご遠慮ください。黙読でお願い致します。
- ●経本、御念珠、補聴器、門徒式章の貸し出しは行っておりません。
- ●お布施は指定された箱にお入れください。
- ●法要後のお茶会は中止させていただきます。

たとえ寺院側で感染リスクの予防に注意を払っていたとしても、最終的には個人個人のリスクマネージメントが重要となっていきます。皆様のご協力とご理解のほどよろしくお願い申し上げます。ご質問やご意見のある方は寺院までお知らせください。皆様とお会いできるのをこころより楽しみにしております。

合掌
トロント仏教会　門徒総代会

佛心

二〇二〇年一一月号
浄土真宗　本願寺派
トロント本願寺

仏教会に戻って来られて

この度、カナダ政府から無事に聖職者VISAが届きトロント仏教会に戻って来られました。まず、お寺を離れたことによって迷惑をかけました多くの御門徒方にお詫び申し上げます。またその期間中に大切な人を亡くされた遺族の方には深くお詫びするとともに、墓地へのお参りを改めてさせていただければと思います。

また、その期間中に寺院運営に尽力してくれたトロント仏教会の総代の方々、特に寺院の法要にいたって尽力して下さった宗教コミティのポール青木さんとダーナ中野さん、開教使アシスタントのジョアン湯浅さん、ジェフ・ウィルソンさん、デニス間所さんには深く御礼申し上げます。

お寺から離れていた期間に多くの御門徒方からのメールや手紙、電話等をいただきました。皆さまからあたたかいお言葉を頂戴し、また改めてここトロント仏教会で尽力したいと心より願わせていただきました。

十月二十五日の日曜常例法座でトロント仏教会に戻り、約一年ぶりに仏教会の内陣で阿弥陀経を読経させていただきました。そのとき思い出したのは、まだコロナウィルスが流行っていないちょうど一年前のことでした。その頃は多くの御門徒方が寺院まで参拝に来られて、法要後はお茶会をし、和気あいあいとした和やかな空間がお寺にはありました。いま思うと、それは大変貴重で有り難いものだったとしみじみ感じています。

今はコロナの影響であの時のように寺院に集ってお茶をすることはできません。しかし不幸中の幸いとでもいいましょうか、今日では多くの人がインターネットとパソコンを当たり前のように利用しています。そのため寺院でも十一月からはFacebookのライブストリームを始め、十二月からはZoomへ変更し法要のオンライン中継をしています。家に居てソーシャルディスタンスを気にせずとも法要に参拝していただけるのは、寺院としても嬉しいことです。ただ私としましては、またいつかは皆さんが安心してお寺に来られること、そして一緒にコーヒーやクッキーを摘みながら、法要後の井戸端会議ができることを心より楽しみにしています。

この度、お寺を離れている間に多くの仏教書を読み、改めて勉強をさせていただきました。やはり僧侶として諸先輩方がしたためられた仏教書を通して仏さまの教えに身を染めていくことは大変大事なことです。私がまだ高校生だったときに住職であった父親から「より多くの仏教書と出会いなさい」と言われた事がありました。当時はあまり仏教に関心がなく、本を読むことすら好きでなかった私は、父に「いつになったら仏教書を手に取らなくてもよくなるのか？」と尋ねたことがあります。すると父から一言「往生させてもらうまで」と返事がきたのを今でも覚えています。いまそのことを思い出すとき、改めてその言葉が私にとって意味深いものだったのかと感じさせていただいています。

ただ今回のことで一つ気がついたことがあります。それは、仏教書ではときとして知り得難い仏さま教えを御門徒さんとの出会いや会話を通して自然と教えてもらっていたということでした。真宗のみ教えを机上の空論とせず私生活の中で手を合わせお名号を称えている御門徒さんの姿は、まさに念仏者としての私の鑑でした。それは仏教書を読み漁るだけではなかなか出会い難きことで、御門徒方からの「お育てにあずかっていた」ということを改めて気付かせていただきました。「お育てにあずかる」とは、この手を合わせ念仏申す身に仕上げてくれるということです。

私は得度を十九歳のときに受けさせていただきました。その時にある先生から言われた言葉があります。それは、「君たちは得度資格を本山から授かり、いま僧侶になったが、まだ僧侶ではない」といういっけん矛盾したような言葉でした。（当時は正直よく意味が分かりませんでした・・・。）

そして住職になるための資格（教師資格）を授かったときも同じ先生から「自坊に帰っていろんな人から「ご院家（いんげ）さん」と呼ばれるだろうが、決して胸を張らないように」と言われたのを覚えています。

そして開教使資格をいただき、四年ほど前にここカナダ開教区でお勤めをはじめさせて